

LAタイムズ、オピニオン
2002年11月17日（日）

〔環境〕
海面下で徐々に広がる異変

ランディ・オルソン

環境保護活動の中で生まれた新しい言葉がある。それは難解な響きを持ち、なじみがうすいので、専門家の言葉だと思われがちである。

その言葉とは、「ベースラインの変化 (Shifting baselines)」で、実は誰もが知っておくべきだ。ベースラインの変化は、私たちが日々直面する生活の質にかかわる決定に影響するからだ。ベースラインの変化は、長期に渡って気づかれぬまま徐々に起こるものだ。田園地帯で野鳥や蛙が姿を消したり、ロサンゼルスからサンディエゴへの運転時間が伸びたりと、様々なところに見られる。理想体重 65 キロの人が 70 キロになれば、その人のベースラインが（ちなみにウエストラインも）変化したことになる。

この言葉は、1995年に漁業生物学者のダニエル・パウリー氏により作り出された。これは私たちが必要としてきた言葉であり、瞬く間にあらゆる分野に広がった。都市の退廃から娯楽の質の悪化まで、様々な物の分析に使われている。

環境保護論者の中で、ベースラインは生態系の健全さを計るための重要な基準点である。これは何を基準として変化を判断するのか、元の状態がどのようなであったかを示すものだ。野牛が無数にいる草原、野鳥が集まるフロリダの湿地、鮭があふれるアメリカ北西部の川など、理想とするベースラインは、人間がダメージを与える前の状態なのだ。

すでに退行した生態系のベースラインが分かれば、その状態を取り戻すべく努力することもできる。しかし、記録を始める以前からベースラインが退行していたとしたらどうか。結局、退行した状況を正常、もしくは良好であると受け取りかねない。

現在アメリカ北西部のコロンビア川には1930年代に比べて2倍の数の鮭が生息している。これだけ聞くとすばらしいことのように思えるが、これは1930年代をベースラインとした場合のことである。実はコロンビア川の1930年代における鮭の数は1800年代と比べ、たったの10%にすぎない。1930年代の数字はその時すでにベースラインが変化していたことを物語っている。

現在多くの環境保護団体がこの問題に頭を悩ませている。未来の自然、さらにはかつての自然の姿を見極めようとしている。

この問題を特に私の主要研究分野でもある海洋に当てはめて考えてみたい。昨年、スクリップス海洋研究所のジェレミー・ジャクソン氏が雑誌『サイエンス』の巻頭記事でこの問題を取り上げている。そしてこの記事は雑誌『ディスカバー』によって2001年の最も重要な発見に選ばれている。

世界中のデータをまとめたジャクソン氏と18人の共同執筆者は乱獲が過去1000年の海洋における最も重要な変化であると主張している。さらに、人類が長期間にわたってあらゆる場所で海洋に与えてきた影響は計り知れず、海洋生物のかつての全容をつかむのは困難であるとしている。

科学者の抱える最大の懸念のひとつに、多くの海洋の生態系におけるベースラインの変化がある。これは、私たちがすでに退行の進む海岸を訪れ、以前の状態を知る由もなく、美しいと感じているということだ。

今日私たちはカリフォルニアの昆布棚にダイビングに行く。そこにはかつて大型のブラックシーバス、ブルームテイル・グルーパー、シープヘッドがあふれていた。いまだにその美しさは目を見張るものであり、ダイビングはすばらしい経験である。しかしベテランダイバーは、「昔はもっと美しかった」と思わずにはいられない。

このようなベテランダイバーの記憶がなければ、若い世代はすでに変化してしまったベースラインをそのまま受け入れ、魚のいない昆布棚やサンゴ礁の状態に満足してしまうことは、多いにありうる。それゆえに、現状だけでなく、以前の状態を記録することが重要なのである。

海洋の未来に関しては意見が分かれるところだ。海洋生物学者は、魅力のある魚は捕獲し尽くされ、しぶとく魅力のない種類のみが、海に残っていく

だろうと主張する。クラゲやバクテリアなどがいわば海のねずみやゴキブリというわけだ。学者は、世界でもっとも退行が進む海岸の生態系として、黒海やカスピ海、さらにはチェサピーク湾の一部を挙げ、クラゲとバクテリアしかない指摘する。

新語「ジェリーフィッシュ・ブルーム（クラゲの異常繁殖）」はあまりにも耳になじみすぎてしまった。もともと、ある地域でクラゲの数が突然上昇することを表していた言葉だ。2000年にはこのテーマで国際シンポジウムが開かれるほどまでに大きな懸案事項となってしまった。そんな中で世界の漁業は急激な減少傾向にある。

海は広くて深く、人はその変化になかなか気づかないものだ。しかし、ときに長期にわたり、ある1つの項目に注目して海の変化について研究を重ねると、非常に憂慮すべき状態を発見することがある。例を挙げると、前出のジャクソン氏が勤めるスクリップス海洋研究所が、完全に消滅してしまった生態系であるジャマイカの珊瑚礁について記録を行った。この研究で名を馳せている同氏は「1970年代に私が紹介した様々な珊瑚でびっしり覆われた状態はほとんど壊滅状態になってしまった。乱獲・海岸開発・珊瑚の白化現象により、生態系は濁った海水の中で藻に覆われた死んだ珊瑚の山に変わってしまった。」と語る。この状態を絵葉書にしたいなどと思う人はいないだろう。

来年、海洋の状況について、ピュー・チャリタブル・トラスト海洋調査報告書と米海洋委員会報告書という2つの主要な報告が発表される。両報告書の発表に先立ち、もれ聞こえてくる内容はあまり芳しくない。

アメリカが海洋に関する主要報告を出してから30年。当時の報告書には「いつか海洋の状態がひどく悪化する恐れがある」と警告されていた。近々出される報告書には今日の海洋の状態がひどく悪化しているとの指摘があるだろうと関係者は言う。

オーシャン・コンサーバンシー（海洋自然保護団体）、スクリップス海洋研究所、サーフライダー財団は来年早々の大規模なメディア・キャンペーンに向けてすでに準備を開始している。海洋全体の将来やベースラインの変化に関する問題への関心を高めるためだ。現状での解決策は明らかだ。さらに環境に配慮し、海洋の状態が悪化するのを避ける努力が必要だ。多くの環境保護団体がこうした目標の達成を支援するための行動計画を立てているが、唯一欠けてい

るのが世論の支持だ。

海洋に対して私たちには集団的な責任がある。かつて海洋がどのような状態だったのか、これまで海洋に何を投棄してきたのか、食卓に登る魚介類がどこから来たのか、食べ物の嗜好によって海洋を危険な状態にさらしていないかどうか、自分自身に問いかけるべきだ。

さらに、より哲学的に生活におけるベースラインの変化について考える必要がある。私たちはどこでどのようにして基準を低くし、かつて容認できなかった事を容認してしまったのかを検討する必要がある。これまでベースラインの変化を受け入れてきたことにより環境が悪化したのは明らかだ。同様に我々の生活も何らかの形で被害を被っているのではないだろうか。

ランディ・オルソン：映画制作者、南カリフォルニア大学海洋生物学教員